グローカル通信

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN
2026.3 vol.70

「ソーシャル・イノベーション実践演習」最終発表会	1,2
修士論文を書き終えて	2
2025年度修士論文・博士論文　題目一覧	3
ご退職にあたって　白石先生からのメッセージ	4
院生の声～リタイア後に大学院で学ぶ意義～	4
早期履修生の感想	4
事務局インフォメーション	4

穏やかな日差しに春を感じる今日この頃、皆様は健やかにお過ごしでしょうか。本号では今年度新設された「ソーシャル・イノベーション実践演習」での最終発表会や、修士論文の執筆を終えた大学院生からの感想、修士論文と博士論文の題目の一覧、退職後や入学前から学んでいる学生の声をお届けしております。是非ご一読くださいませ。

本号が地域公共人材総合研究プログラムに携わる皆様や、来年度から入学される皆様の一助となれば幸甚です。来年度も皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

「ソーシャル・イノベーション実践演習」最終発表会を終えて

ソーシャル・イノベーション実践演習の概要

「ソーシャル・イノベーション実践演習」は、大学連携型ソーシャル・イノベーション人材養成プログラムの核となるキャップストーン科目です。

2025年12月6日（土）、龍谷大学深草キャンパス　慧光館にて「ソーシャル・イノベーション実践演習」最終発表会が開催されました。受講生たちは4つのチームに分かれ、地域の課題の解決に向けた施策の立案に約1年かけて取り組んできました。今回はその成果についてご紹介します。

内田 恭彦（政策学部教授）

2025年12月6日にキャップストーン・プログラムの発表会が慧光館で開催されました。

キャップストーン・プログラムとは龍谷大学・琉球大学・京都文教大学による「大学連携型ソーシャル・イノベーション人材養成プログラム」の中心科目。3大学混成チームで実際の社会課題の解決策を作ります。

取組んだのは「醍醐地域の活性化」「ファイナンスによる京町屋課題解決」「多様な学びと教育をめぐる課題」「障がい者雇用」。どのチームも現場に足を運び、社会制度・構造を明らかにし、素晴らしい解決策を披露していました。

例えば「醍醐地域の活性化」チームは同地域の人口流出要因が産業の弱体化および都市開発による地域イメージの毀損が原因とし、また「ファイナンスによる京町屋課題解決」チームは京町屋の事業用途価値と居住者の経済的負担の高騰、修繕方法の情報不足などの複合要因が原因としていました。

どのチームも社会課題の制度・構造レベルからの原因分析に基づき解決策を作っており、外部の方々からも大変高い評価を得ていました。受講者がソーシャル・イノベーション人材として活躍されることを願って止みません。

西口 高貴
(政策学研究科修士課程1年)

1年間を通して３大学で連携して行われたキャップストーンプログラムが終了しました。発表会は他大学のメンバーと会う最後の機会でもあり、寂しさもありました。

私のチームは、大学や年代が異なる学生で構成されたのでバランスが良く、いいチームに支えられたと思っています。このプログラムでは１つの正解を見つけるのではなく、多様な視点を踏まえながら解決の方向性を探ることの重要性を課題解決の提案を行う過程で学びました。日頃のチームでの議論や沖縄のフィールドワークを通して、自分だけでは考えることの出来ない視点やアイデアに触れることが出来ました。

メンバーそれぞれの経験や関心が組み合わさることで新たな発想が生まれ、課題に対する理解もより深まったと感じています。キャップストーン科目を通して、心理的な視点といろいろなことに興味関心を持つことが課題解決においてキーになってくると認識しました。今後はこのプログラムでの経験を研究活動に活かしていきたいと思います。

米丸 隼太
(政策学研究科修士課程1年)

SI－Dの授業は、新しいコースということもあり、どのような内容を学ぶことができるのか楽しみにしていた頃を思い出しました。１年間を通して多くのことを学び、知識や考え方を知ることができました。一方でそれらの知識や経験は、実社会において継続的な取り組みに変わらなければ本当の意味でソーシャルイノベーションには成り得ないのだなということも同時に感じました。

「ソーシャルイノベーションとは何か」1年間通して自分に問いかけてきました。他大学との連携の中での学びが知識の幅を広げ、既知の世界では辿り着けない領域まで自分の知識を連れていってくれました。本プログラムを経て、ソーシャルイノベーションとは、「自分自身のソーシャル（視座・考え方・世界観）をイノベーション（変革・広げる）すること」だったように思います。

これからは、この学びを元に実社会で実装していきたいと思います。ありがとうございました。

修士論文を書き終えて

本年度は23名から修士論文・博士論文の提出がありました。
本ページでは2名の大学院生から執筆のご感想を頂きました。

川瀬 遥奈
(政策学研究科修士課程2年)

私は、「京都市田の字地区における観光地化の進展と『地域文脈』の変容に関する研究」という題目で修士論文を執筆しました。

本テーマに興味を持ったきっかけは、4回生時の卒業論文です。地域文脈とはそもそも何か。それは元々あるものなのか、それとも人々の生活の営みによってつくりあげられるものなのか。また、誰の視点から見た文脈なのかによってその意味は大きく変わるのではないか。こうした問いは、私にとっては非常に抽象的で難しいテーマでした。一方で、この抽象度の高さこそが本研究の面白さでもありました。京都市田の字地区における観光地化の進展を追いながら、空間や用途の変化だけでなく、その変化をどう意味づけるのかという視点の違いに着目することは、私にとって大きな学びとなりました。

修士課程の2年間の学びを通して得た多様な視点から地域を捉える姿勢を、今後の研究や実践の場において活かしていきたいです。

大門 祥一郎
(政策学研究科修士課程1年)

土地家屋調査士としての実務と学業を両立させる社会人大学院生としての一年間は、想像以上に多忙でしたが、非常に充実した時間でした。日々の実務で直面する「所有者不明土地問題」に対し、政策学の観点から分析し、その課題を追究し続けた時間は、私の職業人生においてかけがえのない財産となりました。また修士論文を書き終える事ができたのは、多角的な視点からご指導をくださった先生方、ヒアリング調査に快く応じてくださった皆さま、そして共に励まし合った院生仲間の存在があったからこそであり、感謝の気持ちでいっぱいです。この「龍谷大学大学院 政策学研究科」において、同じ志を持つ仲間と出会えたことは、私の一生の宝物であり、この大学院で学べたことを心から誇りに感じています。

そして修士論文を書き終えた今、深い充実感とともに法制度と現場を繋ぐ専門職としての責任を強く実感しています。本研究で得た知見と絆を糧に、今後は実務の最前線から、より良い社会の実現に向けて尽力して参ります。

次に卒業を迎える皆さまへ。ここでの学びが、皆さまにとって実り多いものとなりますよう、心より応援しています。

2025年度　修士論文・博士論文　題目一覧

No.	区　　分	修士論文　題目	氏　　名
		政策学研究科	
1	修士論文	都市における自然アクセスの維持・拡大に向けた課題 －京都市伏見区・稲荷山周辺地域を事例に－	井元 遥己
2	修士論文	1990年代ガーナのカカオ政策におけるCOCOBODの存続をめぐる政策的選択 ―エクイティの視点から見た制度的帰結―	梅原 初音
3	修士論文	地域鉄道廃線跡地活用における初期段階の関係主体形成に関する研究	鎌田 康暉
4	修士論文	京都市田の字地区における観光地化の進展と「地域文脈」の変容に関する研究	川瀬 遥奈
5	修士論文	日韓における若者政策の差異と要因－参画分野に焦点を当てて	佐竹 星哉
6	修士論文	地方議会の低迷の要因分析および活性化に向けての予備的考察	谷口 慎太郎
7	修士論文	多様化する災害における消防団の役割と課題～京都府南部豪雨災害を事例に～	吉田 伊織
8	修士論文	上海市生活ごみ分別におけるAIごみ箱の応用実態と住民認識に関する研究―浦東新区航頭鎮の事例分析に基づいて―	賀 宇帆
9	修士論文	都市公園制度の変遷にみる街区公園の利用による交流の場としての新たな可能性―京都市伏見区西浦町における外国人留学生の視点から―	周 晴輝
10	修士論文	日本と台湾のメディアにおける災害報道と女性像の構築-2024年能登半島地震と花蓮地震を事例とした比較研究-	チョウ シントウ
11	修士論文	奈良県明日香村の古都景観保全における地域取り組みに関する研究	范 伯淳
12	修士論文	こどもの社会参画とソーシャル・キャピタルの形成―兵庫県豊岡市の小中高生団体「Q’s」の事例をもとに―	ＰＡＲＫ ＩＮＨＷＡＮ
13	修士論文	中国における「コミュニティパワー」導入の可能性に関する研究 ―内モンゴル自治区を中心に―	王 鋭
14	修士論文	訪日外国人を対象とする減災政策の課題 －　京都市の現状と政策と中心として　－	安道 亮
15	修士論文	法改正から見る「所有者不明土地問題」に関する研究～実務上の課題に着目して～	大門 祥一郎
16	修士論文	商業施設とソーシャルエンタープライズの関係性と価値共創	成松 正樹
17	修士論文	在宅避難の促進をテーマとした集合住宅単位での地区防災計画策定に関する研究 ー京都府向日市寺戸地区を事例としてー	林 リエ
18	修士論文	日本の選挙とネットメディア　～2024年から2025年にかけての選挙分析～	日隈 慈
19	修士論文	災害関連死認定における認定格差に関する研究 ―未認定事例に対する救済可能性に着目して―	森田 博史
20	修士論文	梅小路クリエイティブタウンにおける仲介者の役割	米丸 隼太
No.	**区　　分**	**博士論文　題目**	**氏　　名**
		政策学研究科	
1	博士論文	社会課題解決活動が触発するアンラーニングを介したイノベーションとワーク・エンゲージメントへの影響に関する研究 ～地域中小企業の持続的成長に向けた意識と行動の変革モデル～	中村 雅彦
2	博士論文	社会的価値と経済的価値創出の両立のメカニズムに関する研究 ～国内中小製造業における価値両立の枠組みの探求とモデル化～	長谷川 友紀
3	博士論文	農村の持続可能性と地域ガバナンスの革新―「萃点」としての社会的企業論	風岡 宗人

ご退職にあたって　白石先生からのメッセージ

本コースにご尽力いただいた白石先生が今年度をもってご退職となります。
多大なるご貢献に深く感謝の意を表すとともに、先生からのメッセージをここに掲載いたします。

　大学院の共同運営コースが始まってから、既に長い月日が流れました。私自身、このコースの立ち上げや運営に携わり、多くの方々と協力しながら日々を過ごしてきました。今年の3月末をもちまして定年退職する運びとなりました。それに伴い、このコースを離れることとなります。これまでのご支援とご協力に心より感謝申し上げます。
　共同運営コースを始めた当初は、NPOと地方行政とのパートナーシップを築き、地域社会に貢献する人材を育むことを目指していました。多様な立場の方々との協働の中で、新しい学びや発見があり、私自身も多くの刺激を受けてきました。
　その後、地域公共政策士の認証制度を京都の複数大学で創設して政策学部・政策学研究科で展開してきました。さらに本年度より、政策学研究科にソーシャルイノベーションデザイナーの認証制度が新たに加わりました。本コースの特色は、龍谷大学の複数学部による共同運営にありましたが、今では全国の大学・大学院との連携を展望する大学連携に特色を持つことになっています。
　これまで築いてきたパートナーシップやネットワークが今後も発展し、地域社会のために活かされることを切に願っています。皆様のさらなるご活躍と、本コースの発展を心より念じております。

院生の声～リタイア後に大学院で学ぶ意義～

安道 亮（政策学研究科修士課程2年）

　企業を早期退職し政策学研究科に入学し修了した安道です。若い院生のみなさんと、私たち社会人院生との大きな違いは、やはり実務経験の有無でしょう。仕事をしている中で、社会の仕組みや組織の動きについてさまざまな疑問や興味が芽生えてきます。しかし実務の現場では、それらの問いをじっくり掘り下げて考える時間がなかなかありません。「なぜ社会はこうなっているのか」「今後どう変わっていくのか」。本当は調べ、考え、議論してみたいのに、それができないもどかしさがあります。社会で経験を積んだうえで理論を学び直し、経験と理論を往復させて考えることができるのは、私たち社会人院生の大きな特権だと感じています。
　さらに、大学院には第一線で活躍する専門家の先生方が多く、興味のあるテーマを自由に学べるという、ある種の贅沢も味わえます。これは道楽ですね。実務経験を土台に学び直し、最新の研究環境や研究手法を身につけ、機会があれば社会にその成果を還元する。そんな可能性があることこそ、高齢の院生として学ぶ意義ではないかと感じています。

龍村 薫（政策学研究科特別専攻生）

　今回、グローカル通信に掲載する機会を設けていただき、ありがとうございます。表題にあるような大それた考えを持って私は政策学研究科修士課程に進んだわけではなく、リタイア後の余りある時間の過ごし方として、今まで経験したことのない分野に興味を感じて取り組むことにしたのです。
　生まれてこの方、地元の学校に進学せず、就職も他の地域を結ぶ鉄道会社に入社し、まったく生まれ故郷に何の恩返しもできてないことに気づき、リタイア後は少しでも恩返しをしたいと、市民大学の推進委員やシルバーセンターで広報のポスティングの仕事をしていたところ、縁あって市の長期計画の生涯学習推進委員会のメンバーに市民代表として推薦されました。
　それまで経験の無い内容に取り組むには、それなりの素養が無いと委員会のメンバーに迷惑がかかると考え、政策学研究科修士課程の門をたたきました。結果的には素晴らしい先生方や講義内容で、有り余る時間もあったため、沢山の科目を履修させていただき知識が蓄積されたことにより、その後の推進委員会の席では建設的な発言ができています。
　残り少ない人生の過ごし方は人それぞれ違うと思いますが、終末に至って自分の人生が有意義に過ごせたと思える人は少ないのではないでしょうか。そういう意味からも、リタイア後もまだまだ興味あることを追求しようとする気持ちが大事で、大学院で学ぶことも意義あるものだと考え、私自身修士修了後も特別専攻生で大学院に残っています。

早期履修生の感想

小倉 凛子（政策学部4年）

　早期履修を通して、大学院での学びに対する具体的なイメージを持つことができました。
　特に印象的だったのは、先輩方や社会人院生の方々と議論を交えた点です。これまで接点のなかった立場の方々の視点は新鮮で、実務経験を踏まえた意見や問題意識の持ち方が刺激的でした。同時に、院生生活の雰囲気や学びの姿勢を身近に感じることができ、自分自身が進学した後のイメージがより具体的になりました。院生になる前に少ない受講数で履修できたため、学部の授業との違いに慣れるのに負担が少ない点が利点に感じました。
　また履修時点においても、卒業論文の書き方や研究の着眼点についてヒントを得られることもあり、自身の研究を見つめ直す貴重な機会となりました。
　さらに卒論以外で学校に足を運ぶ機会ができたことで、学習のリズムを整えるきっかけにもなりました。課題等の期日があることで、自然と卒論に向き合う時間が確保され、気持ちの切り替えにもつながったと感じています。

柴田 将明（政策学部4年）

　2025年度、私は政策学部の学部4回生でした。3回生の頃から政策学部での学びをより発展させていきたいという思いで政策学研究科への進学を考え始めましたが、大学院での授業についてあまりイメージが湧きませんでした。そのようななかで学部生のあいだに大学院の授業を履修することができる早期履修制度の存在を知り、4回生の前期にいくつかの大学院の授業を履修させていただきました。
　特に社会人院生として普段はお仕事をされている方々が、自分と共に授業を受けていることが非常に新鮮で、学部とは大きく異なる環境を実際に履修した上で感じることが出来ました。多様な業界で働いておられる方々との履修なども踏まえて、自分が政策学という分野において何を学びたいのか、政策学とは一体何なのかについて学部生の間から考えることが出来る非常に良い制度であったと感じています。
　2026年度からは本格的に大学院生として、学びや研究に日々邁進していきたいと考えております。

事務局インフォメーション

○入学式

日時：2026年4月2日（木）15：30～　　場所：国立京都国際会館

地域公共人材総合研究プログラム ニュースレター 『グローカル通信』 通巻70号　2026年3月

発　行 / 龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム　H　P / https://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/
連絡先 / 政策学部教務課　編　集 / 安道亮、佐竹星哉、山本安紋
TEL : 075-645-2285 FAX : 075-645-2101　編集補助 / 神野華奈子、越野智晶
監　修 / グローカル通信編集委員会